

資本主義の功罪

野瀬 隆平

最近、盛んに「新しい資本主義」という言葉を耳にする。

しかし、「新しい」資本主義とは、具体的にどのようなものなのか、今一つよく解らない。日本のみならず世界の各国で、同じようなことが云われ、資本主義がかかえる問題を解決しようと模索している。

そんな事を考えているとき、ある興味深いデータが目にとまった。アメリカのエデルマンという会社が行った調査の結果である。

「今日ある資本主義は世界にとって善いことよりも害の方が大きいか」という問いに対する答えが、国によってどう違うかを示したものだ。

ヨーロッパ大陸の諸国では「害が大きい」と考える人が多いが、英・米や日本では良い面を見て肯定的に捉える人が多い。具体的に言うと、フランスでは70%近くが害の方が大きいと考えているが、アメリカでは47%、そして注目すべきは、パーセンテージの一番低いのが日本であり35%と断トツに低いことである。要するに、資本主義の負の面をあまり感じていない人が、日本は世界で最も多いのだ。

何故なのだろうか。

日本の資本主義の生みの親とも云われる渋沢栄一は、当初より資本主義に負の側面があることを理解していた。故に、その弊害を無くすべく資本家には「私」よりも「公」を大事にする道徳的な規範が求められると、著書『論語と算盤』でも述べている。

また、江戸時代から日本には商売について特有ともいえる倫理観があった。例えば、近江商人の「三方良し」の考え方である。今日の言葉で云えば、資本家（株主）だけでなく、会社の従業員や取引先、更には取り巻く社会の皆に利益が行き渡るようにしなければならないというものである。

このような以前から日本に受け継がれてきた資本主義に立ち返れば良いのだろうか。

一方では、ベストセラーとなった『人新生の資本』の著者は、資本主義そのものを否定し、そこから脱却しない限り、根本的な問題の解決にはならないと力説している。さてどんなものだろうか。